
24人目の救世主

Chereen

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

24人目の救世主

【Nコード】

N2709Y

【作者名】

Cherreen

【あらすじ】

交通事故に遭って死んだ・・・と思ったのに目が覚めたらベッドの上！？ここどこ？異世界？召喚？あ、テンプレってやつですね、わかります。役目はなんですか、ありがちな勇者とかですか？え？違う？私を召喚したのが魔王？そんなパターン知りませんよ！な話にしたかった。前中後編。

前編

幼馴染が蒸発した。

行方不明になったとか失踪したとかいう意味ではなく（もちろんそういう側面もあるが）、文字通りすうっと消えたらしい。真昼間、衆人環視のもとで。

当然のごとく大騒ぎになった。輝が蒸発してからしばらく、隣の家にはマスコミの人が毎日のように詰めかけていてテレビ番組で特集を組まれたりしていたが、1ヶ月もするとマスコミの興味は他に移り（政治家の汚職事件などに）、世間からも忘れ去られていった。その中で彼の家族は一生懸命活動をして輝を探し続けていたが、半年経った今でも輝を見つけることは出来ていない。

別の高校に進学した今では、幼馴染といっても輝と言葉を交わすことは少なくなっていた私だが、妹の真希ちゃんとは付き合いがあつたのでその関係で暇なときはビラ配りに協力したりしている。

今日も駅前でビラ配りをした帰りだった。毎度のことだが人間の無関心さに打ちのめされていた。今までの自分もそうであつた自覚があるためその反応の薄さを責めることはできないが、当事者になつてみるとなかなか堪える。

信号が青に変わったので歩きだす。ふと誰かに呼ばれた気がして立ち止まり、振り返る。誰もいなかった。気のせいかな、と前を向きなおろうとしたその時。目の前に、トラックがあつた。

「由奈ちゃん！」

真希ちゃんが半分悲鳴のような声で私を呼ぶのが聞こえる。ドラマや漫画で交通事故のシーンを見て、なんでああいうときってみんな

な逃げようとしなんだろうと思っていたが、その理由が分かった。身体が、動かないのだ。

こんなことなら高いからって諦めたケーキ食べておくんだった・・。

今にもぶつかるといふその瞬間思い浮かんだのはそんなことだった。身体がグイッと引つ張られる感じがして、意識がとんだ。意外にも、どこも痛むことはなかった。

目を覚ますと、ベッドの上だった。奇跡的に助かったのだろうか。驚いて、飛び起きる。

周りを見渡すと、見覚えのない広い部屋にすることがわかった。しかし病院という雰囲気でもない。どういふことか分からずに呆けていると、すぐ傍から声がした。

「お目覚めになりましたか。」

ギョツとして声のした方を見ると、金髪碧眼の優男がいた。

「驚かせて申し訳ありません。私はこの国の宰相をしております、パベルといいます。貴方のお名前を伺ってもよろしいですか？」

17年生きてきてこんなに丁寧に話しかけられたのは初めてである。というかこの人の口から流暢な日本語が出てきたことにビックリだ。違和感たっぷり。しかも宰相ってかなり偉い人じゃなかろうか。

「あ、私は立花由奈といいます。えっと、ここってどこなんですか？」

現役高校生の国語力を嘗めてはいけない。正しい敬語の使い方などわからないのでとりあえずですます調で話そう。

「立花様ですね。驚かせることになると思いますが、ここは貴方のいた世界ではありません。」

優男・・・もとい宰相さんは、笑顔でトンデモ発言をした。

「は・・・？」

「当然の反応かと思います。百聞は一見に如かずとも言いますので、まずはこちらをご覧ください。」

そう言っただけで宰相さんは指を鳴らした。するとその場に水の玉が出現し、シャボン玉のようにふわふわ浮かんで私の前で止まった。宰相さんに促されたのでおそろおそろ触ってみると触感はやはり水だった。彼がもう一度指を鳴らすと今度は水の色が変わった。赤・青・黄・・・と目まぐるしく変わっていく姿を目を丸くして見ていると、宰相さんは再び話し出した。

「これら全ては魔法のなせる業です。立花様の世界には無いものだ

と伺っていますがいかがでしょうか？」

私は目の前の事実には納得してコクコクとただ頷くしかなかった。テレビ番組の手品師がこんなことをやってのけているのは見たことがない。ここが私のいた世界と違うのはわかった。もしかして巷で人気の異世界トリップとかいうやつだろうか？

「ご理解いただけたようで幸いです。それでは本題に入りたいと思います。」

宰相さんが真剣な表情を浮かべたので私も居住まいを正した。

「私共が立花様をある目的でこの世界に召喚いたしました。」

ビンゴだ。召喚。異世界トリップものではテンプレとっていいだろう。ある目的とはなんだろう。魔王討伐とかかな、巫女とか神子とか言われるのかな。意外に思うかもしれないが、私はワクワクしていた。こういった話が大好きなのである。中二病と言ってもいいかもしれない。

その時、ノックもしないでドアを開けて大柄な男が入ってきた。作業着のようなものを着ている。金髪で、紅い眼。そして、言っているのは悪いが、強面である。

「陛下、まだ説明が終わっておりません。」

宰相さんが苦い顔をして言う。陛下ということはこの人は王様か。私は驚きの目でその人を見た。確かに威圧感のようなものはあるが、王様というには些か軽装すぎるのではないか。

「お前の話は長すぎるからな。私が要件を話そう。」

王様はそう言ってベッドの前に来た。近づくに更に怖い顔をしているが、強面の人がみんな恐ろしい人なわけではないと身内で知っているのも動じない。

「娘、私は魔王だ。私がお前を召喚した。勇者を消すのに協力してもらいたい。」

怖い顔には動じなかったが、さすがにこれには動揺した。魔王。魔王ってあの魔王だよな？普通討伐される方の魔王だよな？消すって何？殺人？え、断ったらこれ殺されるの？

私が王・・・いや魔王様を見てポカンとしていると宰相さんがヤレヤレといった様子で口を開いた。

「仰りたいことは沢山あるとは思いますが、まずは話を聞いていただけないでしょうか？」

丁寧だが有無を言わさぬ口調だったので、私はとりあえず何も言わないことにした。

宰相さんの話をまとめるところなる。

この世界には魔族という種族があって、この国は魔族の国であること。こちらは平和に暮らしているのに人間の国が定期的に勇者を送り込んできて困っていること。人間の国は不都合なことがあると全て魔族のせいにしてしまいが実はそれらは全て人間が引き起こしていること。そうやって魔族を悪者にして国民の意思を操作しているらしいこと。ほとんどの勇者が洗脳されて魔王討伐に来るので聞

く耳を持ってくれないこと。魔王はこの世界では最強だが勇者はこの世界の理が通じないので魔王に対抗出来ること。なぜこの世界の理が通じないのかというと別の世界から召喚されたからだということ。この勇者に対抗出来る存在として私が喚ばれたこと。

確かに宰相さんの話は長かった。話の途中でウトウトしかけてしまったほどだ。魔王様はというとその辺の椅子を持ってきて堂々と寝ている。宰相さんの話はまだ続く。

「いきなり召喚してこの国のために働けというのが勝手な話だというのはわかっております。私どもは鬼や悪魔ではありません。ですから引き受けていただいた場合勿論報酬は御座いますし、衣食住や安全は保証致します。貴方が断ると仰るならば今すぐ貴方を元の世界の同じ時間、同じ場所に帰すことが出来ます。こちらの話は以上ですが、質問はございますか？」

人間の世界で鬼や悪魔だと呼ばれているだろう人たちが言う台詞としては少々可笑しかったが、日本語の言い回しではそうなってしまうのだろう。元の世界に戻れると聞いて私は安心した。そして少し疑問を抱く。

「あの、なんだか妙に手馴れていませんか？質問が思い浮かばないのですが。それに私の世界についても色々知っているみたいです。日本語上手ですし。」

すると宰相さんではなく眠っていたはずの魔王様が退屈そうに口を開いた。

「当たり前だろう。お前で24人目なんだから。慣れもするし言葉を覚えもする。」

「ちなみに前の23人の方は断られたのでこちらの記憶を消した上で返還させていただきました。」

前までの人たちに相当苦勞させられたらしい。来たたん騒いだり、夢と信じ込んで聞く耳を持たなかったり、こちらが異世界だと言っても笑い飛ばされたり、喚びだしたのが魔王という事実を知った時点で悲鳴をあげて逃げ出したり襲いかかってきたり。それで話の仕方を学習したようだ。そうして話をきちんと聞かせることに成功しても皆結局帰ることを選んだようなのだが。まあ当然だと思う。自分に関係の無いことには無関心な、現代人だもの。

そして今の魔王様や宰相さんの姿は人間の私向きの姿で、本当は違う姿らしい。人間はカタチが違うものを恐れ、怯え、攻撃してくるか逃げるかするのでこのような姿を取るのだとか。この姿で人間の国に行ってもバレないのだとか。それなら常にその姿でいればいいのではと尋ねると、魔力を使うため、平民には使い続けることはできないとのこと。

色々なことを明らかにする魔王様と宰相さんの口調には明らかにダメ元的な雰囲気漂っている。私も断って25人目の人に望みを託して欲しいと言おうとしたが、一つ引っかかることがあった。

「あの、返還って、同じ時間の同じ場所にしかできないんですか？」

妙な質問だと思ったらしく魔王様が怪訝そうに答える。

「ああ、世界を越える召喚と返還は同じルートでしかしてはいけないことになっているんだ。同じルートを使わないで返還しようとして失敗し、場所は同じだが100年後になってしまった例や異空間に放り出すことになってしまった例があつてな、そう決まったんだ。」

お前は変な娘だな、今までの奴は同じ時間の同じ場所に帰れると知って喜んでいたというのに、という魔王様の言葉を聞きながら私はここに来る前の自分の状況を思い出していた。信号無視のトラックに突っ込まれて、事故死寸前。あの場所、あの時間に戻ったら確実に死んでしまう。魔王様の話は正直よくわからなかったが違う場所や時間には帰せないということは分かった。

「あの・・・私・・・その話、お受けします。」

死ぬほど驚かれた。今まで23人もの人に断られ続けられていたのだから当たり前前の反応かもしれない。

期待とかないで情性で召喚していたんだなあとと思う。その情性での召喚で命が助かった身としては複雑な気分ではあるが。

本当ですかと何度も聞く宰相さんに確認する。

「衣食住も身の安全も保証してくれるんですよね？私一般女子なので何の能力もないのであんまり危険なことはしたくありませんが、安全なことなら。」

そうでなかったら引き受けたりしない。これは私の生活を守るための戦いなのだ。

「それはご安心ください！危険な目に合わせることは絶対にしないと約束します！では本当に引き受けてくださるのですね！ああ、ありがとうございます！」

宰相さんは意気込んでそう言った。神にでも祈り出しそうな勢いだった。魔族だけだ。

中編

そうして私は魔王様の城にお世話になることになった。部屋は寝ていたその部屋のままで。召喚した人用の部屋だったらしい。というか今までの一連の会話を全部ベッドの上でしていた事実以後で気づいて恥ずかしくなった。異常事態で頭が回っていなかったとはいえとても年頃の女子のあるべき姿ではない。

あの後自分の置かれた状況を説明して今回の仕事が終わっても永住したい旨を話すところらで過ごすための知識を付けるためにと教育係とか侍女とかつけられました。至れり尽くせりだな本当に！

喜ばしいことに異世界トリップでありがちな着替えや風呂のお世話を何人がかりでもされるということはなかった。あれだけは絶対嫌だと色んな小説読んで思ってたんだよね。今上の魔王様は質素なのが好きらしい。

教育係さんも侍女さんもとてもしい人（いい魔族？）で短い時間だけど色々なことを教えてもらった。なんでも魔族は超・実力主義で魔王も世襲制ではなく魔力が多く、強いものがるものらしい。魔力の過多は誕生した瞬間にわかるので、その時の魔王より魔力が多い子が生まれたら城で育て、成人したら代替わりするのだとか。

まあ魔族は寿命が長く、繁殖力も弱いので滅多に代替わりはないらしい。今の魔王様もかれこれ536年魔王を務めているのだとか。魔族の成人は50歳らしいから魔王様586歳か！。年増だな！。良かった寿命が短い種族で。そんなに長生きしたくなので、80年生きれば十分だ。

「でもさー、魔王様を殺して自分が魔王になろうっていう魔は居ないの？普通あるじゃんそういう政争みたいなもの。」

魔王様が敬語が気に入らないというので遠慮なくタメ口にした。そもそも魔族の言語には敬語にあたる文法がないのだそう。宰相さんも最初に覚えたとおりの言葉を使っているだけで、それが敬語だと後から知ったようだが、結局はじめに覚えたまままで話しているらしい。

初対面の偉そうな人にはとりあえず敬語を遣っちゃうっていうのが・・・日本人だなあ、と思った。

「基本的に自分より魔力が多いものに勝つことは出来ないからな。誰も無駄死にしようとはせん。それに、魔王のようなつまらない仕事を自分からやりたがるやつは居ない。」

ふうん、平和だなと魔王様の言葉を聞きながら、とりあえず前の23人の中に男の人がいて良かったな、と思う。魔王様みたいなごつい男から女言葉が出てきたらと思うと、ゾツとする。今のセリフを女言葉で言う魔王様を想像するだけで・・・・・・・・・・笑いが堪えきれなくなった。

「何を笑っている。言え。」

魔王様との謁見中に不用意に笑い声を零した私を待っていたのは、口に出すのも辛い、世にも恐ろしい拷問だった。

魔王様の魔王様による私のための女言葉攻め。はー、笑いすぎて死ぬかと思った。

そんな感じでのびのびと過ごしていたある日、人間の国に潜伏している（平和に生活しているともいう）魔から、勇者パーティーがその魔の住んでいる、国境近くの街に訪れたという連絡が入った。ここに来た意味を早くも忘れかけていた私だが、その連絡が入つてすぐに魔王様に仕事を命じられた。その仕事とは勇者と直接交渉をすることだった。

「え、そんなことでいいの？」

「異世界人の中でもお前ら日本人を喚んだのは勇者の警戒心を少しでも下げる為だからな。あることないこと吹き込まれて洗脳された状況でも似たような境遇の同郷の人間の言葉ならば聞く耳を持つ気になるだろう。魔が直接接触するのは危険だろう。」

なんでも異世界人が持つ例外の力というのは魔力の無効化で、魔力の塊のようなものである魔は触れられるだけで無力化してしまうのだそう。

納得した私に魔王様は人型になった教育係と侍女と一緒に勇者が次訪れるだろう街で待機をするよう言われた。

「周りの取り巻きはエディとミルがなんとかしてくれると思うから、勇者の説得は頼んだわ。今後のためにも絶対悪感情持たれちゃダメよ、しっかりね！」

この男は今でも突然私を笑わそうと攻撃を仕掛けてくる。

私は黙って魔王様に近寄り手を伸ばし、彼の腕をしっかりと掴み、仕返しに無力化した彼の足の小指を思い切り踏んでやった。弱点をバラした奴が悪いのである。

指定された街で待っていると、勇者パーティーはすぐにやってきた。どれが勇者は言われずともわかる。無駄にキラッキラした顔をした集団の中で一人だけ浮いている、見慣れた、今や懐かしい日本人顔。この外人顔の世界の中では同じ日本人というだけで古くからの知り合いのように見えてくる。

「……………んん？あれ？思い込みでそう見えるだけ？」

その集団が近づくとつれ疑問は確信に変わった。この距離で見間違える筈もない。直接会ったのは1年近く前だが、最近まで何百、何千回と見ていた顔だ。ビラの写真という形で。

「輝じゃん！あんた何やってんの！？」

咄嗟に私の口から出たのはそんな間抜けな言葉だった。勇者やつてるに決まってるじゃんねえ。

勇者を一目見るために集まった人ごみの中でも教育係の力（どうやったの？って聞いたらニツコリ微笑まれた。なんか黒かった。）で一番前にいた私は思わずバリケードを越えて輝のもとに駆け寄る。面倒そうな顔をしていた輝の顔がこちらを認識した瞬間驚きの色に染まる。

「え、由奈！？どう？」

「×××テル×××××」

キラキラ集団の一人が輝の言葉を遮って輝の前に出て何か言った。こちらの言葉を勉強し始めたばかりの私には何を言っているのかわからないが、とりあえず敵意だけは感じる。

気が付けば周りの集団も戦闘体制になっている。か弱い女子一人になんと過激な集団だ。

やっちゃまったーと冷や汗を垂らしていると後ろからため息と、教育係が何かつぶやく声が聞こえた。その瞬間、世界が固まった。私と、輝と、教育係以外の。

「こんなところで使う予定じゃなかったんだが。とりあえず邪魔者はいないからゆっくり話してくれ。俺はそのへんで寝てるから話終わったら起こせよ。止めた時間戻すから。」

どうやら時間を止める魔法を使ったらしい。魔法が効かない異世界人と術者、術者より魔力が強いものだけが動ける魔法。私が今ぶちこわした作戦にあったから話は聞いている。よく考えられていると感心したものだ。本来もつと人気のない場所で使う予定だったのだけれど。

こうしてはいられないと私は状況の分かっている輝を連れてその場を離れる。いくら聞かれていないとはいえ固まった大勢の人間がいるところで話したくない。怖いし。

とりあえず私たちは再会を喜び、輝の今までの話を聞くことにした。

勇者が輝だったおかげで思ったよりスムーズに話が進む。

輝はいきなり召喚されて何もわかっていない状態で勇者様だと騒がれ、よく分からないうちに勇者だと国民に公表され、その後話を聞くとはあなたには素晴らしい力がある、その力で魔物の脅威に脅かされているこの国を救ってくれ、魔王を倒してくれと懇願されて、仲間たちと一緒に国じゅうを回る旅をしてきたのだという。この流されっぷり、さすがNOと言えない日本人である。

「だってよ、元の世界に還す方法はないとか言われたら、この世界でやっていくならこの人らの言うこと聞いておいた方がいいと思うだろ。」

「え？還せないって言われたの？それ嘘だよ。輝、騙されてるよ。私を召喚した人は普通に還せるし実際に何人も還したことあるって言ってたよ？」

『召喚した人』が魔王だとは今は言わない方がいいだろう。輝は目に見えて怒っている。嘘をつかれるのが嫌いな人間なのだ。昔小さい嘘をついたら1週間くらい無視された経験がある。『召喚した人』が『人』じゃないというのは嘘になるのかなあ。

「ね、私を召喚した人に聞いてみようよ、輝を還せるかどうか。輝だって帰りたいでしょ？」

「う……ん。還りたいけど……いやでも一度引き受けたことだからな……。ていうか、還れるならお前は何で帰ってないんだよ。」

変にうじうじしている。律儀な奴だ。いや、もしかしたらこっちでお姫様と恋に落ちたりしたのかもしれない。王道だし。そもそも質問である。意識して軽く返す。

「あ、私、還ったら死んじゃうんだよね。トラックに轢かれて。」

それから私も今までのことをかいつまんで話した。魔王様のことを除いたから更に。元々輝ほどこの世界に長くいるわけではないので短い話だ。輝が消えた後の話もした。家族が今も輝を探して一生懸命活動している話を見ると、堪えきれなくなったのか、輝は泣い

た。

「ね、やっぱり帰ったほうがいいよ。真希ちゃんたちのためにもさ。きつと帰れるから。私を信じて、ついてきて。」

後編

しばらく決めかねていたようだが、結果、輝はついてきた。本当にそのへんで寝ていた教育係を直接触らないように起こして、話が終わったこと、輝と一緒に来るようになったことを伝えると、教育係はひとつ頷いてまた何か呟いた。すると何もないところから小さな小鳥が現れて、大空へと飛び立っていった。

「今、何したんだ？」

輝が目丸くして尋ねた。

「我らの主様に客人が来ることを知らせたのさ。初步の魔法だぞ、今まで見たことないのか？・・・まあいい、それはそうとあいつらはどうする？」

そう言って教育係はキラキラ集団を指さした。

「いざ帰ろうつてときに騒がれても面倒だし、置いていってもいいんじゃない？あ、でも帰れなかった時のこと考えたら連れてった方がいいのかなあ。輝、どう？居たほうがいい？」

正直来て欲しくない。居心地悪いし。魔王様的にも来て欲しくないんじゃないかな。

輝はまた少し悩み、しかしはつきりと答えた。

「いや、どちらにしても俺はこいつらを裏切ることになる。どうせ別れるならここでも一緒だ。」

曖昧な態度をとっているところくなことにならないって学んだしな、と自嘲するように笑う。なんだか妙に説得力のある言葉である。

それから私たちは魔王様のいる城に向かって出発した。追いかけても困るのであの街の時間を動かすのは城に着いてからにした。交通手段？もちろん馬車に決まっている。歩いていくなんて非効率なこととしていられない。輝は馬車に乗り込むときも後ろの街を気にしていた。やはり気まずい思いがあるのだろう。それとも未練か。私は気がついていないフリをした。

え？侍女を忘れてないかって？大丈夫。彼女は魔法の効かない私さえいなければ城まで一瞬で移動できるのだ。

移動中、私は輝がしてきた旅の様子を聞かせてもらうことにした。なんと輝は馬車に乗るのはこれが初めてらしい。いや私も2度目のだけけども。

魔法で移動することは出来ないし、あの人数が同じ馬車に乗ることとは出来ないし、二つに分けるのも警備上の問題で無理、ということとでずっと徒歩で旅をしてきたそうなの。

輝はこちらの世界で色々なものを見てきたらしい。その中には美しいものもあったし、豊かな生活を送っている現代日本では考えられないものもあったのだとか。

「色んなところ回って色んなもの見たのは素直に良かったと思うけどよー、魔物の討伐が目的とか言う割に全然魔物に出くわさなか

ったんだよなー。噂は沢山聞いたけど。実際に見たのが半年旅して3回ってどうよ？俺のこと恐れて隠れているのじゃないとか言われたけどな。勇者ならモンスターと沢山バトルすんだろぅなと思っただから拍子抜け。盗賊とか山賊に襲われる数の方が多いってどういふことだよ。」

適当に相槌をうちながら、私はその盗賊とか山賊がやったことが魔物の仕業ってことになってるんだろぅな、と漠然と思っていた。

「しかもいつまでたっても魔王のところに行く気配がないし。今更だけどあいつら場所分かってなかったんじゃないかな。見切り発車で旅に出されたと思ったたら結構ムカつくな。」

輝の愚痴はまだまだ続く。勇者にも悩みは沢山あるんだなあ。きつと今まで周りの誰にも言えずに溜め込んでいたに違いない。前はこんなに口数多いほうじゃなかったと思うんだけどなあ。

「まあ雑魚キャラ退治をこなしてもないのにいきなりラスボスってのにも無理があるけどな。」

「・・・・・・・・・・そうだね。」

これからそのラスボスのところに行く、と告げたらこいつはどうするんだろぅ。教育係が御者をしていてこの場に居なくて良かった。居たら絶対居た堪れない空気になる。

いつ打ち明けるべきだろぅか。今のうちに言っておいたほうがいいだろぅか。

「輝、あのね、」

「おい、着いたぞ。出てこい。」

いつの間に止まっていたのだろう。やっぱり今のうちに真実を打ち明けようと口を開いたとき、扉が開いた。

出鼻をくじかれ、ガツクリしている私をよそに、輝は嬉々として馬車を降りた。その後をのろのろと追った私の前には、警戒体制の輝と、困った顔をした宰相さんと、ニヤニヤしている教育係、それと全くいつもどおりの魔王様がいた。

「おい！由奈！どういうことだよ！」

輝に怒鳴られる。怒りのオーラが目に見えるようだ。今までの短い間に何があったのかは大体予想がつく。何でここまで出てきているのかは謎だが、どうせ魔王様がまたいきなり「私は魔王だ」とか言っただろう。私は思わず頭を抱えた。

「あー、黙っててごめん。とりあえず危険はないことは保証するから中で落ち着いて話さない？」

誰が魔王の城なんかで！と輝は憤慨していたが、考えてもみなよ、魔法の効かない私たちにとって魔王城なんて世界で一番安全な場所だよ？何かあっても相手を無力化出来るんだよ？と言ったら洪々ながらも承諾した。疑いの目線が痛い。

話し合いのために用意したという部屋までの道のりで、輝はムスっとした顔のままどこそこと話しかけてきた。

「おい由奈、お前俺に嘘ついたのかよ。」

「嘘なんてついてないよ。あの人が私を召喚したのも本当だし、元の世界に還せるってのも本当。ただ魔王様だって言う輝の立場的にややこしいから言わなかったただだよ。」

「誤解をわかってて言わないってのは嘘と同じだぞ。」

「あー、だからゴメンってば。この後ちゃんと宰相さんが説明してくれるからとりあえずそれ聞いて。向こうは輝に危害加えられないんだから大丈夫だって。」

いくら小声で話してもこの距離なら全く意味をなさないということに輝は気づいていないのだろうか。今の会話は一部始終が全員に筒抜けである。その証拠に前を歩く教育係の肩が笑いを堪えるように震えている。この笑い上戸め。

部屋に着いた。なんと和室だった。座布団が4枚しいてある。私と輝の向かいに机を挟んで魔王様と宰相さんが座り、ドア付近の壁に教育係と何時の間にか帰ってきていた侍女が立つ。どうでもいいけど和室に外開きのドアって違和感が……。

落ち着いたところで宰相さんが事情を話し出す。敬語というのが良かったのか輝の怒りは目に見えて収まり、話が進むに連れて顔に同情すら浮かぶようになった。

思っていたより受け入れが早いな、まああれだけ不満と疑問持ってたら当然かなー、と先ほどまで馬車の中で聞かされていた愚痴の数々を思い出す。

そうやってぼんやりしているうちに宰相さんの長い話が終わりそ

うになつていた。あ、魔王様また寝てる。緊張感ないなこの人は。輝はというと、くそ、あいつら皆で俺を騙しやがって！と怒りの方向をキラキラ集団とその黒幕に向けたようである。輝、なんか怒りっぽくなつた気がするなあ。

「そういうことですので、私どもとしてはこのままそつとしておいていただけるならそれだけで十分なのです。」

宰相さんは話をそうやって締めくくつた。私の出番はここからだ。魔王様が寝ているのも構わず話しかける。

「魔王様、輝は召喚されたときに還す方法はないって言われたらしいの。勇者だから特別な？魔王様でも還せない？」

私も輝も真剣に魔王様を見つめる。寝ていたはずの魔王様はやっぱりちゃんと聞いていたようで、ゆっくりと目を開けて答えた。

「誰だろぅが還すのは簡単だ。大体還せないはずがないのだ。相当力が足りないのではない限りな。」

「あ、足りなかったのかもな。その勇者くん、連絡の魔法見て驚いてたからなあ。あれすら出来ない魔術師しかいないってことだろ。」

教育係が文字通り横から口を出してきた。そうか、と魔王様がうなづく。

「まあ、還すのは問題ない。ルートは身体が覚えているからな。ただ、こちらに来た時と同じ場所、同じ時間にしか帰れない。それは聞いたか？」

魔王様が輝に直接聞く。私の前で魔王と勇者が交わす初めての会話になる。

「ああ。それで由奈が帰れないんだと聞いた。由奈の説明じゃよくわからなかったが、理論もな。」

わかりづらくて悪かったな、と少しムツとする。でも輝は帰れる、という事実の上では、そのくらいの嫌味は赦してやってもいい。問題は全て解決して、場はすっかりなごやかムードだ。ホッとしてお茶請けに置いてあった和菓子風の菓子里に手を伸ばした私は、続く輝の言葉に、驚かされることになった。

「・・・魔王、俺と一緒に、俺が来た時と同じ場所、同じ時間に由奈を還すことは出来ないか？」

輝の時間に帰る。すっかりこの世界でのんびり生きていくつもりになっていたのですねなこと思いつきもしなかった。帰れるなら帰りたい。でも。思わず口を出す。

「ちょっと待って。輝がいなくなった時間には、今ここにいる私とは別にその時の私が生きているんだよ？一緒に帰ったらその世界には私が2人存在してることになっちゃう。そんなのおかしいよ。」

「それは・・・そうかもしれないけど、じゃあお前は帰りたくないのかよ！俺だけ帰して1人で残るつもりなのか？そんなの俺は認めねえぞ！」

何故か輝がものすごく怒っている。

「認めなければどうするの？無理やり連れて帰って世界をおかしくするの？それとも私と一緒にこっちに残るつもり？」

「うつ……。ああそうだ、残ってやるよ！とりあえずここにいれば安全なんだろう？」

「ふざけないで！私は輝の家族がどれだけ輝を想っているのか見てきたんだよ。輝がいなくなってどれだけ悲しんでるかも傍ですっと見てきたの。無事に帰れる輝が帰らないなんて、そんなこと許せるはずないじゃない！」

言い争いはどんどんヒートアップした。お互いが何を言っているかわからなくなってきたとき、コホン、と魔王様が咳をした。

「何やら色々悩んでいるようだが、心配しなくて大丈夫だぞ？説明が長くなるから詳しいことは言わないが、由奈が勇者の時間に戻っても世界の構造を変えてしまう心配はない。由奈があの世界に着いたとき、あちらの由奈は消え、同一人物が二人存在することにはならない。」

「「え？」」

思わずポカンとする。数秒後、公衆の面前で全力の言い争いをしってしまったことに気づき、顔から火が出るほど恥ずかしくなった。

「じゃ、じゃあ、私も元の世界に帰していただけなのですか？」

思わず敬語になる。生まれて初めて人を敬ったかもしれない。

「ああ、問題ない。」

敬語を遣ったからか、魔王様は少し嫌な顔をしたが、きっぱりと答える。

さっきまで喧嘩をしていたことも忘れ、思わず輝と手を取り合って喜ぶ。

周りの目など、もうどうでもよかった。

数時間後、私たちはこの世界に来た時の服を着て、魔方阵のようなものの中に立っていた。

あれ、と私は何やら作業をしている魔王様に尋ねた。

「そういえば、私たちに魔法って効かないんじゃないの？」

「ああ、これは魔力をエネルギーにして発動するが厳密に言えば魔法じゃないからな。お前に説明しても無駄だから、特別な力でも思っておけ。」

事実だけどひどい言いようだ。私はふくれっ面をした。

「よし、準備が出来たぞ。由奈、勇者にしっかり掴まれ。絶対に離すなよ、異空間に放り込まれて二度と出て来れなくなるからな。」

そんなのは御免だと、私は輝に思いっきり抱きつく。そしてホラ、輝も！と促すがなかなか掴もうとしない。

「それにしても、由奈がいなくなったら寂しくなるなあ。今からでも考え直さない？俺たちと楽しく暮らそうぜ。」

笑い混じりの声で教育係が言う。すると輝の腕が私の体に回った。う、ちよつとキツイくらいだ。でもこれくらいしないと異空間行きかもしれないから我慢我慢。

教育係には嫌ですよ、私は元の世界で楽しく暮らすんです。こつちも楽しかったですけどね、と返す。

魔方陣らしきものが光り始めた。こちらにいられるのも、きつともうあと少しだ。

「魔王様、色々ありがとうございました。こつちにいた間、本当に楽しかったです。きつと忘れません。」

「ああ、俺も楽しかった。・・・由奈、最後に一つ言っておきたいことがある。」

真剣な目で見つめられる。輝の腕に力がこもった。

「どうか、元気でね。私のこと、忘れちゃイヤよ」

その声を引き金にしたようにあの、ぐいつと体を引っ張られる感じがした。ニヤつと笑った魔王様の顔が見える。

あの野郎、最後に爆弾落としていきやがった。異空間に落ちたらどうしてくれる。忘れられるかコノヤロー！

私は油断すると暴れ出しそうになる腹筋を抑えるため、ぎゅつと目の前のものにしがみついた。上の方から、呻き声が聞こえた。

返還は、無事成功した。

しかし私は、こちらの世界に戻る選択をしたことを、早くも後悔し始めていた。

輝がどんな状況で消えたのかということが頭からすっぱり抜けていた。

真昼間、衆人環視の下で。

もっと詳しく言うと、輝が通っている男子校の全校集会の真っ最中、ステージの上。

そんなところに急に女子高生が現れたのだ。元々そこに立っていた生徒としっかりと抱きしめ合って。（そう、あの時は命を守るための行為としか思っていなかったけれど、冷静に見れば正面から抱きあった形だったのだ。）

その上、この世界に着いたとき、授業中だったこちらの私もクラスメイトの目の前で消えたことになる。

そのことに思い至ったとき、顔から一気に血の気がひいた。

これからどうなるかは、輝のときの騒ぎを思えば想像に難くない。

かくしてできれば当たって欲しくなかった予想通り、その日から私の受難の日々が始まったのであった。

f
i
n
.

後編（後書き）

これにて完結です。

由奈が送る日々がどんな日々になるかは皆様のご想像にお任せします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2709y/>

24人目の救世主

2011年11月10日18時01分発行